

令和5年度

第17回 うるま市教育実践グランプリ

【実践記録部門】



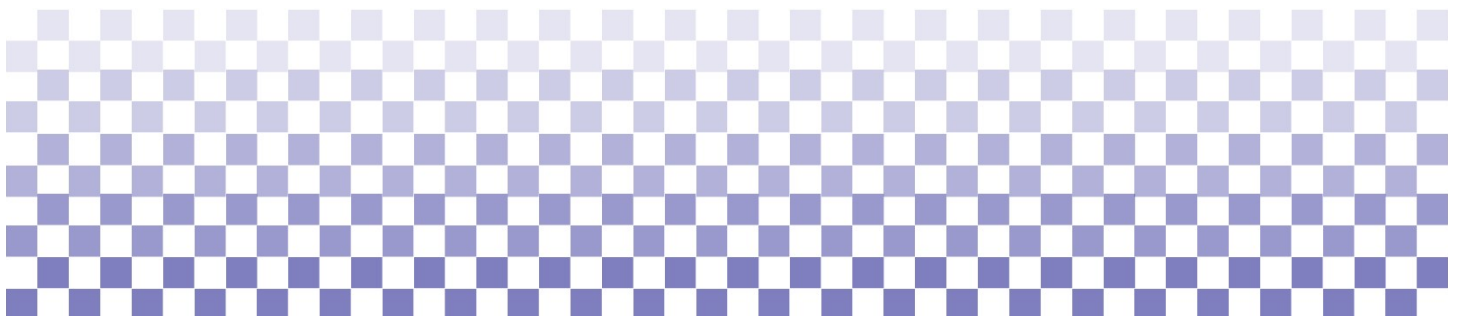
うるま市立中原小学校

教諭 島袋 恵人

教諭 徳盛 碧

未来社会をを生きる力を育む児童会活動の工夫

～活動の見える化やコラボ企画、学級との連動を通して～



未来社会を生きる力を育む児童会活動の工夫

—活動の見える化やコラボ企画、学級との連動を通して—

うるま市立中原小学校 児童会・委員会担当 島袋 恵人・徳盛 碧

I テーマ設定の理由

変化が激しく、先の見通しが立ちにくい現代の社会においては、多くの出会いや経験を自らの未来につなげる資質・能力を育成するため、キャリア教育の視点からも異年齢集団活動による交流を重視した児童会活動を工夫していくことが大切だと考える。

児童会活動は、学年、学級を超えて全ての児童から構成される集団での活動であり、異年齢の児童同士で協力したり、よりよく交流を深めたり、協働して目標を実現したりしようとする活動である。また、それらを通して育成される資質・能力は、その先にある中学校、高等学校における生徒会活動において、さらに学校卒業後は、地域社会の自治活動の中で生かされ、さらに育まれていくものである。

「R4 沖縄県版 授業がわかる 主体的に活動する 夢や希望を持つ 魅力ある 学校づくりパンフレット」において、魅力ある学校「三者の視点」の中に、子供にとって成長を実感できること、教職員にとって子供の成長を見て感じ取れること、保護者・地域にとって子供たちに活躍の場があること等が挙げられており、児童会・生徒会組織と学級活動を連動させた「自治的な活動」の展開が重要であることが述べられている。

本校では、児童に育むべき資質・能力を沖縄県キャリア教育において身に付けさせたい力として示されている「かかわる力」「ふりかえる力」「やりぬく力」「みとおす力」ともリンクした「なかよくする力・心」「かんがえる力」「はっけんする力」「らしさを発揮する力」（以下、「なかはらの力」として整理し、「子供のエネルギーを活用した活動づくり（児童会活動の活性化）」を指導の重点項目として位置付け、組織的かつ協働的に推進している。令和4年度からは「トライ&エラー（まずはいろいろや

ってみよう）」をモットーに、「なかはらの力」を手足に掲げた本校オリジナルキャラクター「なかまるくん（令和4年度誕生）」を意図的に活用しながら、児童から出てきたアイデアやカリマネ推進部会（中原っ子児童会部会）、委員会担当職員による仕掛けを通して、子供たちのエネルギーを生かした様々な活動やミニイベント（以下、「なかまるくんプロジェクト」）に取り組んでいる。その成果として、児童会役員を中心に、失敗を恐れず様々な取組に前向きに挑戦してみようという自主的・実践的な姿勢が多く見られるようになった。一方、見通しや計画が不十分なまま活動を実施してしまっていたことや、振り返りができないまま次の活動へ進んでしまっていたこと、また児童会役員や各委員会、各担当職員からの企画や提案、取組の意図がうまく学年や学級に伝わっていないままスタートしてしまった活動があったこと等が課題として残った。その要因として、児童会役員や各委員会、各担当職員の「もっといろんな活動にトライしたい」「次はあんな活動も取り入れてみよう」という思いや行動が先行して、次から次へとプロジェクトが進んでいったことが考えられる。

そこで今年度は、活動内容や振り返りの見える化や有志でのコラボ企画を取り入れた協働体制、学級活動との連動を主な工夫点とし、また今年度スタートした中原っ子児童会新組織体制を生かしながら「なかまるくんプロジェクト」を推進し、「なかはらの力」のレベルアップや中原っ子児童会の掲げる目指す学校の4つの姿「あいさつができる元気な学校」「進んで学習できる学校」「人を大切にできる学校」「花や緑がいっぱいできるきれいな学校」の実現に向け、取組を進めていく。

II 実践内容と工夫

1 活動の見える化について

「見える化」をすることで、「次はどんな活動があるのかな」「あの時こんな活動をしたな」等、活動の見通しや振り返りができ、「次はこんなこともやってみたいな」という気付きも生まれやすくなると考える。見通しを持つことで安心して活動に参加でき、振り返りができることで学びを自覚し、またそこで気付きが生まれることで主体性が育つ。このような「見える化」のよさを生かしながらプロジェクトを推進していく為に、本校2階にある中原っ子児童会掲示板を「なかまるくんプロジェクト BOARD」として、アピールした(図1)。**【ふりかえる力】【みとおす力】**



図1 なかまるくんプロジェクト BOARD

「なかまるくんプロジェクト BOARD」は、イベント名や活動の様子、児童からの感想や関連する「なかはらの力」、目指す学校の姿とのつながりもひと目で分かるように工夫した。そうすることで、中原っ子が身に付けたい力や目指す学校の姿を日頃から意識しながら、また各活動につながりを感じながら過ごせることから、学びの可能性を高めることが期待できる。さらに、本校1階にある委員会掲示板を「中原っ子児童会 BOARD」とし、各委員会の活動の様子や話し合いで決まったこと、取組の価値付け等を掲示することで、委員会活動を引っ張る6年生児童の意欲付けも図っていった(図2)。



図2 中原っ子児童会 BOARD

学年や学級の配置上、普段「なかまるくんプロジェクト BOARD」や「中原っ子児童会 BOARD」の前を通る機会が少ない児童もいることから、なるべく早めに中原っ子全員に伝えたいことや見てほしいものがある場合は、児童玄関前のなかまるくんポスト前やモニターを活用して「見える化」を図った。(図3・4)

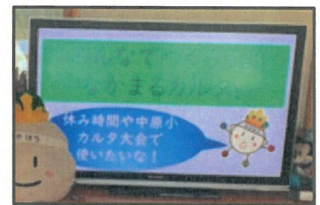
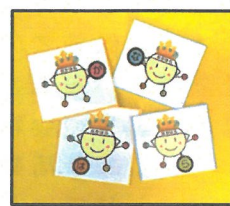


図3 なかまるくんポスト前 図4 児童玄関前モニター

ミニイベント実施前や実施中には、校内放送やモニターを活用して、活動のねらいや関連する「なかはらの力」を確認し、イベント後には、その活動と関連する「なかはらの力」を強調した「なかまるくんシール」を、さらに学期末には、力をアップさせた証として「なかまるくんバッジ」を全校児童にプレゼントした(図5・6)。シールやバッジは運営委員会が有志を募り、仲間との協働を楽しみながら作成・準備をするなど自主的な姿を多く見ることができた。**【かかわる力】【多様な他者との協働】**



バッジやシールは、児童の取組やがんばりを価値付けながら渡すことを意識した。

図5(左)なかまるくんシール 図6(右)なかまるくんバッジ

また、中原小学校公式noteを活用して、保護者への見える化も意識した。児童自らがnoteへの投稿を行うことで、当事者意識も高まり、さらに主体性を引き出すきっかけ(仕掛け)となった(図7・8)。**【やりぬく力】【ふりかえる力】**



図7 中原小公式note

図8 noteに投稿する児童

2 コラボ企画を取り入れた協働体制について

年度当初、運営委員会と各委員会の委員長からなる「児童会部会」を開き、決まったことをする日頃の常時活動や当番活動以外にも、自分たちの「やってみたい」という思いを大切にしながら、また各委員会と協働して学校をよりよくしていこうという中原っ子児童会の目指す学校の姿や方向性、トライ&エラーという活動のスタンスを確認した(図9)。**【みとおす力】****【かかわる力】**



図9 中原っ子児童会部会 (5月8日)

月に一度設けられている委員会活動の時間や日頃の常時活動に加え、新しい企画やイベントの準備をするには、昼休みや放課後にも時間を取る必要が出てくる。そのような時に、一つの委員会や担当児童に任せるのではなく、他の委員会とのコラボや有志での協働、さらには下級生も巻き込むことを意識させることで、企画やイベントの準備がスピーディーにかつ楽しみながら進められた。(図10・11)**【かかわる力】**

【やりぬく力】**【多様な他者との協働】**



図10(左) インターンで運営委員会と協働する4・5年生
図11(右) お知らせポスターを掲示する1・2年生

このように、児童にコラボや協働を意識させることで「明日の昼休み遊ぶために、今日でプロジェクトの準備をしておこう」「〇〇さんとなら協力してできそうだから声をかけてみよう」等、自ら考えて行動する姿が見られるようになった。委員会活動に対して「やらされている感」もなくなり、協働の楽しさを味わいながら自主的に動き出す児童の姿も多く見られるようになった。

3 自由参加型のミニイベントについて

本校で昨年度から実施している「なかまぐるくんプロジェクト(ミニイベント)」のほとんどを自由参加型とした。自由参加型のメリットとして、イベントが企画しやすくなること、イベントに対する子供たちの思いが把握しやすいこと、取組の反省を次回のイベントに生かしやすいことなどが挙げられる。全員参加型の場合、「参加しなきゃいけない」「運動系のイベントは苦手だからな」等というネガティブな思いを持つ児童もいたり、参加者全員が楽しさや充実感、達成感を得ることは難しい。しかし自由参加型であれば、個々の興味・関心やタイミングで参加できるため、満足度も高くなると考える。参加後の満足度が高まると、次回のイベント参加への意欲付けにもなり、参加したイベントを通してできたつながりや充実感などから、「次はあのイベントも参加してみようかな」「〇〇さんと一緒ならできそうだな」というポジティブなマインドや、失敗を恐れずにトライする力の育成も期待できる。

また、参加人数や子供たちの反応や感想、職員からの意見などから、子供たちの興味・関心や実態把握がしやすくなることで、取組の反省を次回の企画に役立てることもできる。企画や運営をする側も、今回は運動面で次は学習面、この時期は生活面のイベントを実施しようなどと、実施のタイミングを意図的に設定したりと工夫しながら進めることもできた(図12・13)。**【ふりかえる力】****【みとおす力】**



図12 校長先生と運営委員会でプチミーティング

イベント前のプチミーティングで、活動の意図やねらいを確認する校長先生と運営委員。運営委員の当事者意識もアップ!



図13 児童会部会で役割分担

次回のイベントへ向けて、ルールや役割分担について話し合う運営委員会。

Ⅲ 実践事例

1 「なかまるくんプロジェクト」

本校で児童に育むべき資質・能力として整理された「なかはらの力」を手足に掲げている本校オリジナルキャラクター「なかまるくん(図 19)」を、ワークシートや掲示物など様々な場面で意図的に活用することで、その時の学習や活動を通してどんな力を身に付けたいかを児童に意識させることができる。学校での学びにつながりを感じながら、また親しみや愛着を感じながら、楽しい生活を送ってほしい。そういうねらいのもとスタートさせた「なかまるくんプロジェクト」実践事例の一部を以下に示す。なお、今年度(4月～12月)は職員による「仕掛け」や学級との連動、児童会新組織体制を生かすことで、たくさんのミニイベント(新規10以上)を実施することができた。



図 19 本校オリジナルキャラクター「なかまるくん」

(1) あいさつビンゴ・あいさつ大使

ビンゴゲームを楽しみながらあいさつを自分からするという状況をつくり、体験させることで、自主的にあいさつをする児童を育てること、学年や学級を超えて児童が相互にふれ合う中で、新しい人間関係を築いたり、自他のよさに気付いたりすることをねらいとした取組である。運営委員会(ヒーローズ)・生活安全委員会(グッドモーニング)コラボ企画で、年度当初の4月24日～4月28日に実施した。同時に、各学年から集まったあいさつ大使を中心に、朝の校内清掃をしながらあいさつ運動を行った。多くの児童があいさつを交わし、そのよさに気付く活動となった(図20・21)。

【人間関係形成・社会参画】【な・か・は・ら】



図 20 あいさつビンゴを楽しむ児童



図 21 あいさつ大使 活動の様子

(3) ありがとう・きらりカード

学年や学級を問わず、全校児童が友だちの優しい言葉や行動を見つけてカードに書く活動を行うことで、感謝の気持ちを持って優しい心で人と接することができるようになることをねらいとした取組である。運営委員会(ヒーローズ)・アナウンス委員会(ナカハララジオ)・校内環境整備委員会(井ポスター)コラボ企画で、児童玄関前に設置された「なかまるポスト」に投函されたカードをアナウンス委員会(ナカハララジオ)が毎日読み上げ、その後校内に掲示している。5月8日から現在(12月末)までに3500枚以上の投函があった。中には職員や保護者へ向けて書かれたカードもあり、書く人ももらう人もハッピーになる活動となった。掲示したカードは年度末、児童に配布し、キャリアパスポートに入れる予定である(図22)。

【人間関係形成】

【な・か・は】



図 22 ポストに投函されたありがとう・きらりカード

(4) 中原っ子の歌 week♪(歌詞を探せ!)

運営委員会(ヒーローズ)主催の新企画である。本校には、創立10周年に作られた「中原っ子の歌」がある。その歌

っかけとなった。低学年児童の手伝いや高学年児童のサポート等、縦のつながりも広がる取組となった。最終日には本物のウルマーが登場し、児童に「なかまるくんシール」を配布。参加人数も300人を越えるなど、大盛り上がりとなった(図28)。【人間関係形成・社会参画・自己実現】【な・は・ら】



図28 ダンスを楽しむ児童の様子

(10) GIGA week♪

ICT委員会(チームGIGA)主催の新企画である。10月10日~10月20日の期間に、ChromeBookの活用能力を全校児童で楽しみながらアップさせることをねらいとした取組である。特に1分間のタイピング数がアップするごとになかまるシールがゲットできるという「タイピング選手権」は大盛り上がりで、低学年児童のタイピング力の大幅アップにつながった(図29)。【人間関係形成・社会参画・自己実現】【な・か・は・ら】



図29 イベントを周知するポスターとモニター

(11) ハロウィーン仮装 day

5年4組が企画提案したものである。10月31日は「全学級1~3校時の間は仮装しながら授業を受けてもよい」という内容である。同時に、集会委員会(チーム制作)と校内環境整備委員会(井ポスター)の6年生児童も有志を募りながら校舎内の掲示物の作成や当日限りのフォトスポットを設置するなど、自治的に活動する姿が多く見られた。子供たちのエネルギーが活かされた、また「やってみよう」という思いが形となった思い出に残る1日となった(図30)。【人間関係形成・社会参画・自己実現】【な・か・は・ら】



図30 ハロウィーン仮装 dayの様子



(12) もっとすてきなあいさつ week♪

運営委員会(ヒーローズ)主催の新企画である。「イベント中は活性化していたが、最近では中原っ子のあいさつに元気がない気がする」という課題を解決したいという思いから企画された取組である。10月30日~11月2日の期間をあいさつ週間とし、児童玄関で「もっとすてきなあいさつシール」を配布。最終日にはプロバスケットボールチーム琉球ゴールデンキングスのマスコットキャラクターも登場し、朝のあいさつ運動を盛り上げてくれた(図31)。【人間関係形成・社会参画・自己実現】【な・は・ら】



図31 あいさつ運動を楽しむ児童と価値付けシール

(13) チャリティーweek♪

運営委員会(ヒーローズ)とアクティブ委員会(ボランティア)のコラボ新企画である。11月22日~12月8日までを募金期間とし、中原っ子に募金の協力を呼びかけた。また、11月19日の運動会当日、運営委員会を中心に多くの有志で作成した「なかまるくんバッジ」を販売し、その売り上げの一部を募金する取組も行なった。売り上げは330個以上にのぼり、大盛況となった(図32)。またこの取組は、事前アナウンスや事後の振り返り等を通して、キャリア教育や環境教育、SDGsの学習にもつなげることができた。【社会参画・自己実現】【な・か・ら】



図 32 バッジの作成、販売の様子

(14) ティーチャーズクイズ♪

3年2組が企画提案したものである。「クイズを通してなかよくする力をアップさせたい」という思いから企画された取組である。お昼の校内放送でのクイズをワクワクしながら待つ児童やクイズを真剣に考える児童、企画が通ったことを喜ぶ3年生等、多くの笑顔が見られる活動となった。【人間関係形成・社会参画】【な・か・は・ら】



図 33 企画賞を喜ぶ3年生児童

(15) 中原っ子カルタで異年齢交流！

6年1組の企画提案で11月7日に実施した。国語科「みんなで楽しく過ごすために」の話合い活動を通して、中原っ子カルタを活用した1年生との交流会を行なった。6年生児童の1年生を気遣い思いやる姿や、交流を喜び、活動を楽しむ1年生の姿が見られる有意義な時間となった(図33)。



図 34 カルタを楽しむ1年生と6年生

(16) Nフェス♪

運営委員会(ヒーローズ)、アナウンス委員会(ナカハララジオ)、集会委員会(チーム制作)コラボ企画で12月12日に実施した。自己を表現する楽しさや喜びを味わうこと、イベントを子供たちで運営することで主体性を育むこと等をねらいとして行う18番大会である。昨年度に引き続き多くの出場希望者が募り、当日も大盛り上がりとなった(図34)。

【人間関係形成・社会参画・自己実現】
【な・か・は・ら】

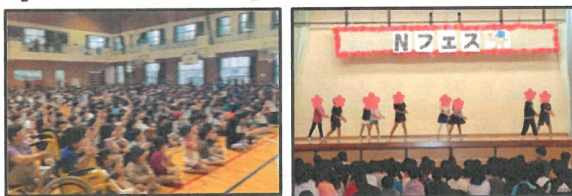


図 35 Nフェス当日の様子

(17) お昼のナカハララジオ生放送♪

中原っ子皆で給食時間をもっと楽しく過ごしたいという思いから始まった、アナウンス委員会(ナカハララジオ)による5分間ラジオ生放送である。イントロクイズや季節に合ったトーク内容など、リスナーの興味を引くための工夫をしながら、自分達で放送原稿を考え取り組んでいる。お昼の中原小が明るい雰囲気になる、人気企画である。【人間関係形成・社会参画】【な・か・は・ら】



図 36 ラジオ放送をする児童と投稿ポスト

2 「なかまるくんプロジェクト」が定型化しないための工夫

「解説特活編」において、児童会活動は全児童が参加するものであり、様々な活動の形があり、その関わり方によって児童は様々なことを学び体験すると述べられている。また、基本的な活動の流れとして「課題の発見・確認から、解決に向けての話合いを経て、合意形成をして解決方法の決定を行い、決めたことを実践し、振り返り、次の課題に向かっていくというもの」と示されている。以上を踏まえ、多くの学級で児童会活動について話し合うきっかけを作り、中原っ子全員が児童会の一員であることを実感させるために、今年度導入した「企画書」の活用を充実させていった。企画・運営やそこに向けた話合い、計画、実践、振り返りという過程を通して、運営委員会を始めとする各委員会同士や児童同士、職員とのつながりや関わりを深めながら、活動を充実させていった(図35)。

「企画書」を導入したことで、高学年以外の多くの学級からも意見や提案が寄せられるようになり、新たな企画もスタートし始めた。各学年児童の児童会活動へ関心も高まってきたことから、子供主役の活動や自治意識の醸成につながったと捉える。

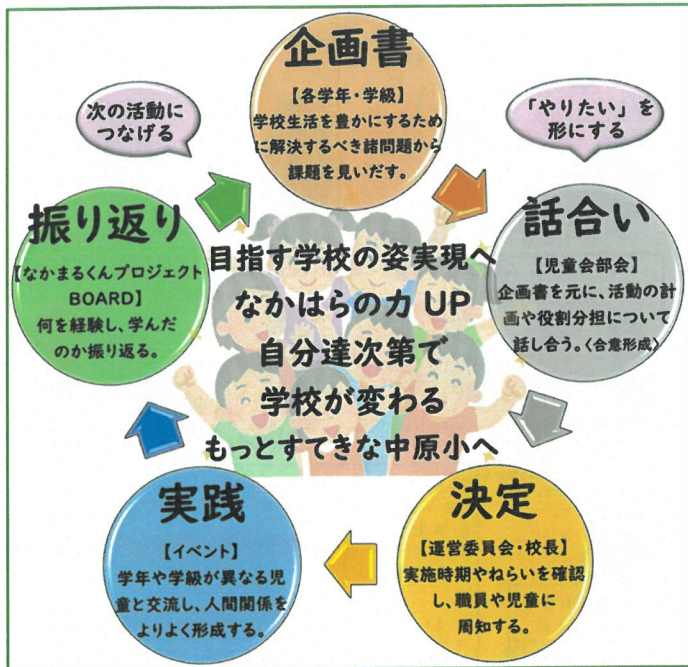


図 37 「なかまるくんプロジェクト」活動サイクル

3 プロジェクト活性化へ向けた「仕掛け」

中原っ子に、「また何か始まるぞ」というワクワク感を持たせる工夫として、イベント実施中は、児童がデザインした「なかまるくんプロジェクトのぼり旗」を正門に立て、イベントを盛り上げた。また、毎日行われるお昼の清掃後の学年集会（6年生）を活用した委員会活動の価値付けや個別に行う意識的な対話・言葉掛けでのサポート、また覚えやすく親しみやすい各委員会のネーミングや運営委員会のやる気 UP と時短効果を生み出す Chromebook の多用など、様々な「仕掛け」を通してプロジェクトの活性化を図った（図 36）。



図 38 なかまるくんプロジェクト（児童会活動）を活性化させる為の仕掛け

本研究では、活動内容や振り返りの見える化や有志でのコラボ企画を取り入れた協働体制、学級活動との連動を主な工夫点としながら「なかまるくんプロジェクト」を推進することで、昨年度課題として残った見通しや計画が不十分なまま活動を実施してしまっていたことや、活動の振り返りができないまま次の活動へ進んでしまったこと等の改善に向けて取組を進めてきた。それと合わせて、キャリア教育の視点に立った「なかはらの力」のアップ、中原っ子児童会の目指す学校の4つの姿「あいさつができる元気な学校」「進んで学習できる学校」「人を大切にできる学校」「花や緑がいっぱいできる美しい学校」の実現を図ってきた。以上を踏まえた上で、アンケート調査をもとに考察していく。

(1) 教職員へのアンケート調査

4月～11月までの取組に関するアンケートの結果（図 37）、「児童会活動は、見通しを持った計画的な活動になっていますか」という質問に対し、「そう思う」と回答した教職員が 25%で、「どちらかと言えばそう思う」と回答した教職員が 75%という結果となった。肯定的な理由として、「昨年度よりイベントが同時進行することが少なくなった」「部会での確認やお昼のアナウンス、モニターを活用した事前周知があったから」などが挙げられた。しかし、「次々とイベントがあるので、活動が十分でないものがあつた」という意見もあつたことから、各委員会担当職員との連携や計画の確認をさらに密にしていく必要があることが分かった。「振り返りを意識した活動になっていますか」という質問に対しては、「どちらかと言えばそう思う」と回答した教職員が 87%で、「どちらかと言うとそう思わない」と回答した教職員が 13%という結果となった。「どちらかと言えばそう思う」理由として、「お昼の放送やモニターでの価値付け、なかまるくんプロジェクト BOARD を有効に活用できていた」などが挙げられた。「どちらかと言えばそう思わない」理由は

「学級で毎回振り返りをしていたわけではないから」であった。イベント毎に「きらりカード」で振り返る等、各学級でも振り返りや自己評価の工夫が必要だと考える。

「各活動のねらいや意図は学年や学級の児童に伝わっていますか」という質問に対しては、「そう思う」と回答した教職員が47%で、「どちらかといえばそう思う」と回答した教職員が53%という結果となった。肯定的な理由として、「なかまるくんプロジェクトBOARDやシール・バッジでの意識付けや価値付けが有効であった」等が挙げられた。以上のことから、昨年度の課題は概ね改善傾向にあるが、「活動の振り返り」に関してはさらなる工夫改善をしていく必要があると捉える。

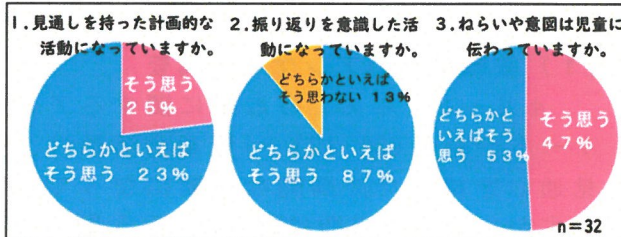


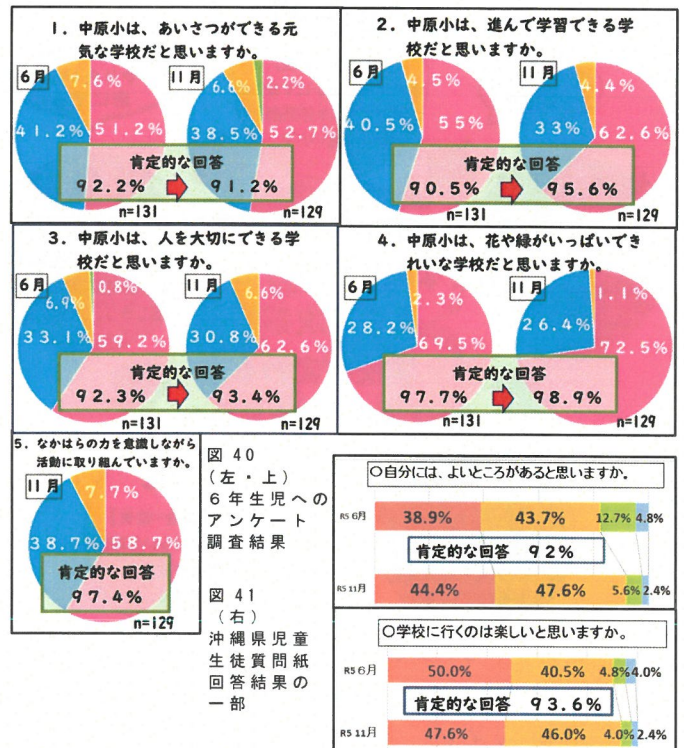
図 39 教職員へのアンケート調査結果

(2) 6年生児童へのアンケート調査

「なかはらの力」や、中原っ子児童会の目指す学校の4つの姿の実現に係る児童の実態を把握し、その変容を見とるために、6月と11月においてアンケート調査を行った。アンケートの結果(図38)から、プロジェクトを通して多くの児童が「なかはらの力」のアップを実感し、目指す学校の4つの姿を実現できたと感じていることが分かった。

しかし、「あいさつができる元気な学校」の実感が6月に比べ1.2ポイント下回っていたことから、あいさつを楽しむイベントを実施しただけでは普段の学校生活において定着までにはいかないことが分かった。次年度新たな取組の工夫が必要である。

沖縄県児童生徒質問紙回答結果(図39)においても、自己に関する質問に肯定的に回答する児童が増加していたことから、児童会活動の工夫は、児童の自己有用感の育成にもつなげることができたと考える。



IV 成果と課題

1 成果

- (1) 活動の見える化や価値付けの工夫を行うことで、児童に身に付けたい力や目指す学校の姿を意識させながら活動に取り組ませることができた。
- (2) 有志での協働やコラボ企画を通して、児童会活動をさらに充実・活性化させることができた。
- (3) 「企画書」を導入し、児童会活動と学級活動を連動させることで、児童の自治意識の醸成し、自己有用感の育成につなげることができた。

2 課題

- (1) 各学級での児童の活動の振り返りや自己評価の在り方をさらに工夫・改善していく。
- (2) 児童会部会や教職員同士の対話を充実させ、さらに意図的・計画的で見通しを持った活動にしていく。
- (3) 4・5年生児童への引き継ぎを意識した取組を充実させる。

〈参考文献〉

- ・文部科学省 国立教育政策教育課程研究センター 2020 『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料【小学校 特別活動】 東洋館出版社
- ・文部科学省 国立教育政策教育課程研究センター 2019 「特別活動指導資料 みんなで、よりよい学級・学校生活をつくる特別活動 小学校編」 文溪堂
- ・文部科学省 2018 「小学校学習指導要領解説 特別活動編」 東洋館出版社